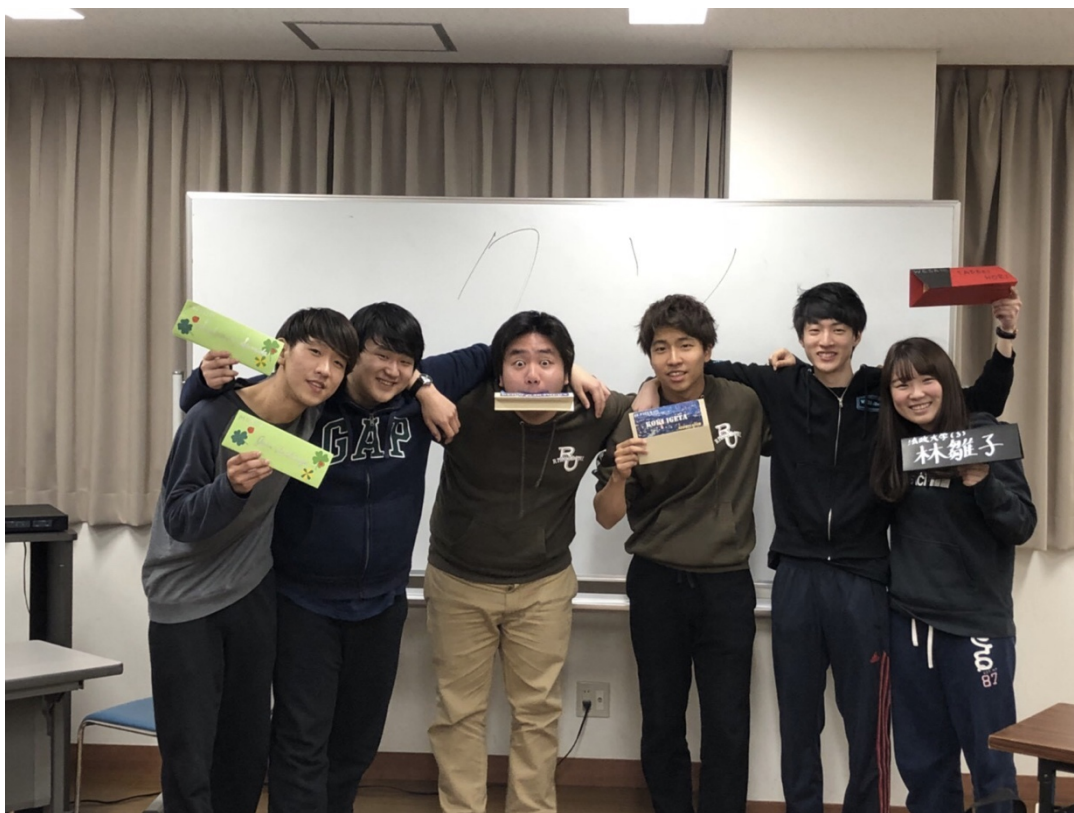


Spring Seminar 2018

5th Exhibition Table

総評



【目次】

- | | |
|----------|----------|
| (1)議論の流れ | 金井(早稲田4) |
| (2)選定理由 | 宋(上智4) |
| (3)コメント | 溝口(法政4) |
| (4)コメント | 廣橋(早稲田4) |

議論の流れとコメント

文責 金井（早稲田4）

はじめに

皆さまお疲れ様です。早稲田の金井（通称も一たん）です。エキシビジョンテーブルの大まかな流れを記そうと思います。ところで、現在国会では安倍内閣が森友・加計学園問題に揺れております。外から見ている我々にとって、真偽のほどは国会で議論されている内容から推察するにとどまります。今回のテーブルに関しても同様です。我々の理解とテーブルメンバーの理解が100%合致しているとは限りませんが、その点をご容赦ください。

テーブルメンバー

井桁（立教3）住田（明学3）手代木（明学3）
中村（立教3）林（法政3）堀（早稲田3）

ジャッジ

宋（上智4）廣橋（早稲田4）金井（早稲田4）溝口（法政4）

議論の流れ

中村のナローでディスが始まる。オピニオンプレゼンター立候補者不在であったため、中村がオピニオン案（ニュープロ）を提示した。その内容は、現在生徒に最も必要とされる能力とその能力を発展させることができる政策を考えるというものであった。他に対案はなく、このオピニオン案の検証が始まった。中村の提示した検証手順は以下のとおりである。

- ① 現状の日本における最大の問題の特定
- ② 問題解決につながる能力の特定

- ③ 生徒の能力を向上させるための法案の決定
- ④ 法案により生じる AD、DA の比較検討

この検証手順に則り、オピニオン案の検証が開始された。なお、③（もしくは②）と④においてはコンパリソンを用いて検証するものとされた。

①において、堀が“economic problem”を住田が“military problem”を提起し、いずれを最大の問題とするかが争点となった。どちらが最大かをコンパリソンにより決定する方針についても検討されたが、中村・住田を中心に2つの問題が相互に関係しているために比較困難であることが示された。“economic problem”が“military problem”を生み、さらにその逆も起こりうるということだ。また、中村を中心に“monetary problem”が2つの問題における根本原因であること、そして②の段階としてその根本原因を解決する能力を特定する必要性も示された。ここで、中村が“monetary problem”を解決する能力として林の提示した“IT skill”が有用であることを示唆。これによって、“IT skill”が“monetary problem”ひいては“economic problem”と“military problem”をも解決する能力という方向性で議論が進んだ。

ここで、林・堀らの指摘により中村が検証手順を Problem - Solvency Format に変更。その理由とされたのは、解決されるべき問題と問題解決の方針（向上させるべき能力）が特定されたことと、2つコンパリソンを行う時間が残されていなかったことである。新しく提示されたオピニオンシートでは、“monetary problem”により苦しむ日本国民が TG、“IT skill”を向上させる科目（プログラミングなど）の導入が Mandate とされた。住田・林を中心に Solution において“monetary problem”が解決されないという趣旨の疑問点が提示されたが、中村により AD が完全に否定されることはない一蹴され、AD 立論に至ったところで終了した。

おわりに

本年度のエキシビジョンテーブルは、（毎年そうかもしれませんが）新しいこ

とへチャレンジしたいという姿勢がみられました。大変良いことだと思います。と同時に、今回の議論でのチャレンジを見て、改めて基礎・基本の重要性を感じました。“economic problem”や“military problem”といった大きな視点で議論を進めようとする姿勢自体は良いですが、それぞれの定義は何なのか？“IT skill”によってどのようなプロセスで諸問題が解決されることになるのか？そもそも“monetary problem”により苦しむ日本国民はいるのか？いるとしたらどんな人なのか？など、どれも定義やリンケージの確認といった基本的な質問ですが今回の議論では軽視されていました。新しい内容を議論する際には特に、こうした基本的とされる質問は（ジャッジも含めた）全員でイメージを共有し、建設的な議論をするために必要不可欠です。

何事においても新しいことをしようとするときにベースとなるのは、それまでに培ってきた知識やノウハウです。たとえば、新しい言語を習得しようとするときは必ず既知の言語を通して新言語を理解しようとするはずです。新しいことに挑戦するときこそ、それまで学んできた基礎・基本の観点が非常に重要になります。そうした観点をより意識して新しい議論に挑戦し、さらに良い議論をつくっていただけたらと思います。

選定理由など

文責：宋 知典(上智 4 年)

根拠と推移について

今年度の 5th エキシビションテーブルは最終的にはここ数年間と変わらない 4th エキシビションテーブルの上位 3 人が参加するものとなった。しかしながらこの 2 年間で異なり D+ランクを自動的に授与することはしなかった。これは関東 1 位というランクの重さは変わらず、なおかつエキシビションテーブルにおいて一人だけその他のパンツよりも上のランクを授与するに足る突出したパフォーマンスがなされているのかという観点によるものである。そのため D+を絶対に出さないという意図は微塵もなく、パフォーマンス次第であったことをここに明記しておきたい。

今年度春の大セミナーにおいて用いた採点基準は多分に自分の意見が盛り込まれており、個人的には過去類を見ない平等性と正確性を担保できていると考えているが、疑念を持たれた現役及びジャッジにおかれましてはその一切を容赦していただきたいと思います。

最終的な順位付けは、金井(早稲田 4)・宋(上智 4)・廣橋(早稲田 4)・溝口(法市 4)ばらばらなタイプの 4 人で話し合っただけであり、一切の主観と感情を排して決めたものである。

最終結果

1 位 中村(立教 3) D ランク

2 位 住田(明治学院 3) D ランク

3 位 林(法市 3) D ランク

4 位 堀(早稲田 3) D ランク

5 位 手代木(明治学院 3) D ランク

6 位 井桁(立教 3) D ランク

選定理由

採点において主観は排しましたが個人的な印象に主観及び個人的な理解が入り実際の議論や意図と異なっている点があるかもしれませんがご容赦ください。

1 位 中村(立教 3)

オピニオンプレゼンターが一人も出ないという異常事態の中果敢にも誰か一人が意見を提示してそれをベースに進むのではなく、みんなで意見を出し合おうという議論の根源に立ち返ったかのようなオピニオンシートを提示した。しかしながら結局は普通のオピニオンシートに落ち着いてしまい、そつなく“普通の”オピニオンプレゼンターをやり議論をリードしたことが彼を一位とした理由である。

仮に前半の議論をどこかに着地させていれば間違いなく 1 位と+が付与されていたのではないかと考えると惜しい。これは彼以外にも言える話ではあるが。

関東 1 位の責任は自分などが想像もつかないほど重いものであることは想像に難くないが、彼には 1 位だからこそ最初に提示したオピニオンシートのように“異質な”ものをしっかり議論してその姿を後輩たちに見せて行ってほしいと思う。“異質”なものを提示してしっかり議論できるほどほどやさしい世界でないのは誰よりも骨身にしみて知っているがそこは妥協をせずに 1 位として希求してほしい。彼は恐らくそれが可能なコンテンツとトリートの両方ができる人間だと思うのでそう願う。

2 位 住田(明治学院 3)

一貫したダウトの提示とそこから派生したコンテンツ的な議論の補強が彼を 2 位とした要因である。多くの人がテーブルに提示していたコンテンツそれ自体の質の違いはジャッジにはわからず、だからこそ客観的にそれが議論にどれほ

どの影響を与えたかという観点でしかはかることが出来ない。その観点からすると唯一影響のあったコンテンツは彼のものだった。

結果的に彼はダウトの提示が主であったわけだが、人によってはダウトの提示と聞くと、ダウトじゃなくロジックもしくはアーギュとして出せばいいのと思う人もいるだろう。しかし僕個人としては無駄にロジックの形に落としたせいで時間がかかることが多々あるのでそのようには考えていない。提示する形に差異はあれど最終的に結論が同じであればその形は問題ではないと考えている。願わくば彼もそのような柔軟な思考でもってディスカッションに新たな風を吹かせてほしい。

3 位 林(法市 3)

オプレの中村と住田の二人だけで議論が作られかねなかったテーブルにおいて対立軸を打ち出せて、それをしっかり議論できたというのが彼女を 3 位にした理由である。4 位の堀と役割はほとんど同じであったが議論に対する影響が順位を分けた。

先ほどから再三議論に対する影響度などとはざいているわけだが、議論に影響を与えられるかなんて知るかと思う人もいるだろう。そういった人に僕は問いたい、トリートはセオリーで流すだけのものなのかと。そして言いたい、それだけがトリートならトリーターなんぞ滅んでしまえと。思うにトリーターとは議論を操る人であるべきである。そこに恣意性を持つかセオリーという“正しさ”に基づくかはたまた別のものか、その差異なんて些細なものである。そういった意識でトリートにあたってもらえればディスカッションは幅が出て面白くなるのではないだろうか。

4 位 堀(早稲田 3)

彼はこのテーブルにおいて中村に次ぐコンスタントな介入をしていた印象がある。しかしながらその介入が結果的には当座のものとなってしまいどこかに紐づいたものではなかったため 4 位とした。

どこかに紐づけるトリートは林の所で書いた通りであるが、それは何も第三者に限った話では全くない、自分のアーギュを自分でもっていきたい方向にト

リートすることもまたアーギュメンターとして必要な素養なのではないだろうか。しかしながら多くの人が第三者的な介入と第一者もしくは第二者としての介入、特にトリートを別としてとらえている。為すことが同じなのにそこまで厳格に分ける理由が自分にはわからない。堀はトリートが上手いタイプであるため自分で提示した論点や他人の示した物も併せて自分でテーブルを巻き込んでトリートできていれば議論の主軸は間違いなく彼になっていたと考えられる。

5 位 手代木(明治学院 3)

極端にのんびり進む今回のテーブルの中でナロー以外に、コンテンツ的なものではなくプロシ的な側面から前に進めるほぼ唯一の介入が見られこの順位とした。逆に言うと前に進めるような介入が出来ていたにもかかわらずそれをうまく生かした展開が見られなかったということでこの順位となった。

今回のテーブルはほぼ全員がコンテンツにしか目を向けない、もしくはコンテンツ以外が主流な議論になれなかったという物であるが、そういった状況では容易に役割が被るという事例が発生すると思う。特に今年の現役の代は良くも悪くも頭のおかしい人間が少なく役割が被って泥沼と化した争いを多く見た。だからこそいかに早く介入するかが大事なのはよくわかる。しゃべらなきゃ点数が入らない以上しゃべる必要がある。しかしながらそれでいいのかということとは考えてもらいたい。役割が被るからスピードを争うのであれば役割が被らなければいいのではないだろうか。確かに被らないような特異なことをするのはごく一部の変態だというのは認めざるを得ない。しかしながらテーブル単位で見れば欠けている役割なんていくらでもあるので被らない役割を見つけるのは簡単なはずである。仮にそれが苦手な役割であったとしても突飛なことをしようとするのではなく基本に忠実にやればいいのではないだろうか。そういった視点では彼のスタンスは個人的には高評価であった。

6 位 井桁(立教 3)

6 位という順位が示しているように彼はこのテーブルでは最も有効な介入が出来ていなかったと我々は判断した。しかしながら同時に最も容易に順位をひっくり返すことが出来たのも彼であったことはここに明記したい。

彼はいわゆる普通の介入を続け、それはともすればエキシビのような上のテーブルにはふさわしくないといわれるかもしれない類のものではあった。自分もそういった介入は現役の時は申し訳ないがぼろくそに言っていた覚えがある。しかしそれは最も恐れていたものが基本に忠実なディスカッションであったからである。プロソルやセオリーという歴代の化け物たちがそれを超えようもしくは変えようとして結局は失敗(プロソルやセオリーが残っていることを指す)しているという現状からすると、それは結局基本に忠実であればあるほどプロソルもセオリーも強固なものであることの証左ではなかろうか。もちろんプロソルやセオリーが正しいとは微塵も言っていない、というか僕は言えない。しかしながら同時に強いことも否定できない。だからこそ井桁のようにセオリーに基づいたトリートをきれいに行える人間はそれを恥ずことなく披露するべきだと考える。むしろそういった介入をしてテーブルでセオリーの是非を問うような議論が行われるのであればそれはとても価値のある介入だと評価されるのではないだろうか。そういった議論の方法論的なものであれば仮にトピックののっぴきならないコンテンツが全くなくても個人的には積極的に評価していきたい。

彼が今回のテーブルで普段通りのパフォーマンスを発揮できていたら結論はどういった方向に転がっていたか自分などには予想もつかずだからこそ見てみたいと思った。

所感と補足

ここまで総評を読まれた方、そしてこの先を読む方はもしかするとこいつらエキシビまで行って何やってるんだよ、俺/私と代われよと思われる方もいるかもしれないし、そういった印象を抱かせてしまうような選定理由を書いたことにつきましては謝罪させていただきたい。自分の文章の稚拙さに関してはもうどうしようもないと考えているので、現役の時にエキシビというテーブルにいた人間として事情を説明させていただきたい。

去年自分はエキシビで全くパフォーマンスを発揮できなかった。それはもう宋 知奂があそこにいた形跡を一切感じ取れないほどである。別に他の誰でも成り代われたとジャッジの方は思われていたと思う。言い訳をさせてもらうならエキシビというテーブルに行けたことに自分は心のどこか安堵し、そしてエキシビだからそれにふさわしいパフォーマンスをしなきゃと柄にもなく思ってい

た。ランクなんてどうでもいいと口癖のように言っていた人間がこのざまである。その結果普段何も考えずに介入する人間が頭を使ってしまい調子が崩れた。程度の差はあれどそれと似たような思いをエキシビにいた人たちは持ったのではないだろうか。しかしエキシビにふさわしいディスカッションなどという物が存在するわけもなく。仮にあるとすればそれはそこに行くことのできたその代の上位 6 人が織りなすディスカッションそのものである。エキシビに行くことを許された人間は間違いなくエキシビにふさわしい人間と判断されたわけで、そうならばその人たちが織りなす議論こそがその代のエキシビにふさわしい議論なはずである。だからこそそれに対してその場にパンツとして居合わせることのできなかつた人間がとやかく言うべきではない。これはエキシビに限らずどのランクにも言えることだが。だからこそ僕は君らに自信を持ってほしいと思う。外野に何と言われようとこの代の最高傑作が春セミですと言ってほしい。そしてもし春セミに少しでも後悔を覚えるのならアッセンではより進化した君らの代のそこに居合わせた人たちの最高傑作を見せてほしいと思う。

もうかなり長くなったけどあんまり書きすぎるといろんな人に怒られそうなのでこの辺にしときたいと思います。皆さんお疲れ様でした。基準局長として君らの代に関われてとても光栄でした。アッセンもよろしくね。春セミ期ほとんど頼まれなかったけどプレパのお誘い心よりお待ちしております(笑)

世に出す前に何人かに読んでもらったところ、偉そうだや皮肉がやべえなどのお言葉を頂きましたがそういった意図は一切なく書き上げたつもりです。

コメント

2018 年度春の大セミナーエデュケーション局長を務めていた法政大学市ヶ谷のしゃちよー（溝口）です。現役の際はエキシビジョンテーブルに進むことができず D テーブル D ランカーという結果に終わりましたが、この度訳あってエキシビジョンテーブルのジャッジを務めさせていただくこととなりました。テーブルと参加者への評価とコメント、今年度の春セミを通して感じたことをつらつらと書き綴って行こうと思います。どれも私自身の強い偏見のもと書かれたものであることはご了承ください。

テーブルへの評価

今年度のエキシビジョンテーブルに駒を進めた 6 人は、それぞれ試ジャッジから 4th テーブルで様々なパフォーマンスを披露してくれました。それがどのようなものであれ、この 5th テーブルで彼らが創り上げたものが、エキシビジョンという名にふさわしいと言えるものであったのかは疑問に思います。議論の流れの中で説明があったかと思いますが、オピニオンプレゼンターの選出に 2 時間を要しました。そして残りの 1 時間で議論されたのは“Contents”と呼ぶには程遠い内容でした。その議論を進行する者も深掘る者も現れない中、虚しく議論終了の合図が鳴り響きました。

私は彼らのディスカッションを見る中で、「エキシビには魔物がいる」という言葉を誰かがどこかで言っていたことをふと思い出しました。「エキシビに来たからには何かすごいことをしなくてはいけない」「エキシビでは迂闊にレベルの低い介入はできない」そんな雰囲気部屋中に強く漂い、「エキシビの魔物」に参加者全員が終始オーソリ負けしていました。仕方のないことなのかもしれません。私自身、試ジャッジでの 5th エキシビジョンテーブルは経験したものの、本番 5th エキシビの魔物と対峙した経験がないため、彼らを強く責めることはできません。しかし 4th までの死闘をくぐり抜けてきた彼らなら、もう少し太刀打ちできたのではないのでしょうか。これを読んでいるのが本人で、もし自覚があるのなら反省して次に活かしていただきたいと切に願うばかりです。

参加者への評価とコメント

私が思うに、彼ら 6 人の最も評価できる点は「エキシビを渴望する執着心」です。チーフという役職に対する責任感、先輩への恩返し、同期へのライバル心。その内容や背景は

参加者の中でそれぞれ違ったと思います。しかしこの 6 人は他のどの参加者よりも、心の強いディスカッサントであったと言えます。その心の強さに故、彼らは選ばれるべくして選ばれた 6 人だったのではないのでしょうか。

試ジャッジ期間前のジョイントで、春セミでの目標を聞いた際、中村が「D プラスです」と答えたことを私は鮮明に覚えています。それが冗談であったのか本気であったのかは定かではありませんが、筆者はその時、彼がエキシビジョンテーブルに進出することを確信しました。残念ながら目標の D プラスを達成することは叶いませんでしたが、エキシビジョンテーブル一位という形で伝統となり始めている立教大学チーフとしての底力を証明してくれました。アッセンブリーでは結果だけでなく、内容面も磨き、「魅せるディスカッサント」になってくれることを期待しています。

培ってきた能力を最大限に発揮する上で最も重要なことは、己に対する確固たる自信だと筆者は考えます。住田は自身のコンテンツ力に誇りを持っていました。本テーブルでは残念ながら彼のコンテンツを見ることはありませんでしたが、きっと 4th までのテーブルでは存分に発揮してきたのでしょう。アッセンブリーでは彼のコンテンツを中心に、質の高い論点を議論するテーブルの姿を見たいものです。

法政大学市ヶ谷はおよそ 10 年エキシビジョンテーブルにその名を連ねた者がいない中、林は女性プレイヤーとして駒を進めました。自大学の後輩として、女性ディスカッサントとして、私は彼女を誇りに思います。しかし、試ジャッジ期間に安定した結果を残せていないことも事実で、今後のプレッシャーやランクへの責任は想像以上のものとなるでしょう。持ち前の度胸で乗り越えていってくれることを願います。

早稲田大学の堀は、よく「金井くんのようにになりたい。」と口にしていました。私個人の意見ではありますが、彼は金井を超えるポテンシャルを秘めていると感じます。それが開花すれば、アッセンブリーでファイナルへ進出することは容易いでしょう。そして「金井を超える」という気持ちを強く持つことができれば今後の伸び代は大きく変わってくるでしょう。これからも「ハンドラー」を目指して邁進してください。早稲田大学の強い重圧の中、よくここまで登り詰めました。おめでとうございます。

「理想のディスカッションを追い求める」この言葉が、ディスカッションから逃げる者が自分の実力不足や努力不足を補うために用いる言い訳のようになりつつあることに、筆者は悲しさを感じています。小セミの空き時間に手代木から「勝つディスと理想のディスの違い」について聞かれたことがあります。彼は真摯に理想のディスカッションの実現を目指した追求者の一人であったと思います。アッセンブリーでは、彼の目指した理想を目にすることに期待しています。

私は井桁が本来の実力を十分に発揮していれば、上位3位以内に入るのは容易いテーブルだったと思います。このテーブルに欠如していたのは、井桁の得意とする基本に忠実な Treat でした。筆者は井桁の挙手が無視されていくことに、ディスカッションを見ながら歯がゆさを感じました。しかし基本に忠実な Treat では、ファイナリストになることは到底できません。アッセンブリーでは、これまで培った基礎力を活かして、さらなる成長を魅せてください。

彼ら6人の実力は、まだまだ成長の最中にあります。彼らにはエキシビジョンランカーとしての責任を背負い、各々が理想とするディスカッサントへの道を追い求めて欲しいと思います。

ディス界へのコメント

「ディスカッションは深度と進度に分けられ、それぞれが均衡を保つべきである」

きっと嫌という程聞いたことがあるでしょう。深度は Contents、進度は Handling と呼ばれています。この二つは何段階かのレベルを持ち、それぞれ Question や Doubt、Wondering という形で始まります。Contents は Argument や Objection として。Handling は Confirmation、Suggestion、Treat としてテーブルへ落とし込まれていきます。そしてそれがテーブルで形になった時、はじめて Contents や Handling と呼ばれると筆者は考えます。（※正しくは違います。詳しく知りたい方は筆者に聞きに来てください。）

そして一世代の中には、これらに関する傾向というものが存在します。例に挙げるなら私たちの世代は、上位層が Contents、中間層が Handling（ないしは Treat）という傾向を持っていました。では、本年度はどのような傾向を持っていたのでしょうか。私はそのどちらでもなかったと考えます。これは決して、深度と進度が均衡を保っていたという意味ではありません。言うなればそのどちらもが存在していませんでした。質の高い論点を創り出す者も、ハンドラーと呼べる程に議事進行力に長けた者もいなかったのです。きっとジャッジ基準局をはじめとするジャッジ陣やエデュケーターの多くはこの問題に頭を抱えたことでしょう。

（余談ではありますが、5th テーブル終了後に「D プラスはおろかエキシビジョンテーブル参加者のうち何名かに D マイナーランクを授与するべきではないか」「ランク想定テーブルでランク受賞者なしでもいいのではないか」という議論が行われたほどです。）

なぜ今年は全体の評価がこんなにも低いのでしょうか。もちろん我々の偏見も多少は含まれているでしょう。しかし、これは数字にも表れています。（詳しくは基準長へ）

この問題の原因は「考える癖がある人」の減少にあると思います。本年度の春セミでリフ

レを求められる際、「しゃちょーさんだったらどうしていましたか？」という質問を何度も受けました。上級生の考え方を参考にするのはとてもいいことです。しかし語弊を恐れずに言えば、この質問は思考を停止させている者のする質問です。それを聞いて次のテーブルに昇華することはできるのでしょうか。その質問で上級生がその考え方を培うまでの行程や背景まで聞き出すことはできるのでしょうか。到底、不可能であると思います。プレパ方法に関しても同様です。「どんなプレパをしていましたか？」と問われることが多くありました。しかし介入方法にしてもプレパ方法にしても、それぞれに向き不向きがあります。私の持ち合わせる能力でできる介入方法や、私を成長させてくれたプレパ方法が誰にでも当てはまるものではないことは明白でしょう。そして多くの OBOG から多種多様な方法論を聞き集めても意味はありません。彼らがすべきだったことは、自身の介入方法やプレパ方法の良し悪しを考えることであつたと思います。そして自分に見合う技術の向上を図ることです。技術というのは元来、そうして培うものです。

“You play with the cards you’re dealt ... Whatever that means.”

「配られたトランプで勝負するっきゃないのさ…それがどんな意味であれ」



これはスヌーピーの名言のひとつですが、ディスカッションという競技に当てはまる部分があります。配られたトランプのように、誰も「手札」というものを持っています。ディスカッションが一度はじまってしまうと、この手札で勝負するしかありません。筆者が思うに、この手札を多く持ち、巧みに使いこなせた者がディスカッションを制します。

ディスカッションで勝ちたい。理想のディスカッションを実現したい。どんな形であれ、誰も目標はあると思います。それを叶えるためには手札が必要です。そして手札を増やすために最も必要なものは、才能でもパッションでもありません。「思考」です。考えることをやめないでください。考え抜いた上でどうしても答えが得られなかった時、その時のためにそれらを乗り越えてきた先輩達がいます。しかし、ひとつだけ覚えておいてください。先輩から答えを教わることで得られるのはその先輩と同等もしくはそれ以下の技術だけです。必死に考えて、考えて、考え抜いて、先人たちをも凌駕するディスカッサントになってください。

最後に

長々と厳しいことを書かせていただきましたが、兎にも角にも皆さんお疲れ様でした。特にエキシビジョンテーブルの 6 人の努力や想いは並大抵のものではなかったと思います。今回思い描いた結果を得ることができず、苦渋を飲んだ人もたくさんいると思います。しかしまだ終わっていません。次があります。良くも悪くも、それぞれの参加者の間に大きな実力差はありません。アッセンブリーでのリベンジに期待しています。

ハンドラーを目指していて悩んでいることがある人、アッセンでリベンジしたい人。いつでも連絡をください。あなたに合った Handling を磨く後押しならいくらでも力になります。

私はディスカッションという競技がとても好きです。たとえ同じ論題であろうと、ディスカッションをする度、ディスカッションのことを考える度に新しいアイデアが浮かんできます。「全てのディスカッションは違っていて、全く同じディスカッションなんてない。」という人がいます。その通りだと思います。ただ大切なのは、その違いをどれだけ創り出せるかだと思います。ディスカッションを好きになってください。ディスカッションを楽しんでください。アッセンブリーでは皆さんの個性にあふれた多種多様なディスカッションを見ることができることを心から楽しみにしています。

法政大学英語研究会ディスカッションセクション 2017 年度渉外兼 2017 年度関東渉外長
2018 年春の大セミナーエデュケーション局長
溝口 裕規

5th エキシビをジャッジしました早稲田大学4年の廣橋です。ここから急に日本語がへたくそになります。3時間のディスもなんか教育なのに戦争とかなんちゃらみたいなドラゴンボールみたいな激しさだったのであんまり理解できてない部分が多かったので選定理由や議論の流れなどは書けないから僕からは

1. テーブルやパンツの感想
2. 春セミを通しての感想

1. テーブルの感想としては、まあエキシビだから仕方ないのかなで許されるレベルなのかと聞かれたら僕は怪しいと思うかな。

まず上にも書かれていますと思いますが誰もナローへのツッコミやオピニオンシートを最初は準備していなかった。これはすなわち 5th エキシビというテーブルに置いてあくまで自分がする議論は誰かの元でしかできない、又は自分でしたいことを準備していなかったと僕は判断して若干がっかりしていました。もちろん 5th エキシビョンテーブルに来ることを目標にすることは悪いことではないですが、あくまでそこで終わってしまっただけでは意味がないことなのかなと。まあそんな中勇敢にオプレに立候補した中村をほかのパンツは責めてはいけないのかなとは思いますが。僕も去年同じようなことをしたのでめちゃ気持ちわかるけど。まあオピシの欠点だとか周りのパンツの失態はじふぁんとかがいっぱい書いてると思うので中身はあんまり触れないとします。

では思ったこと

①今年は「オプレ」が勝ったということ

去年の春セミ 1 位は東大の冨永で彼のディススタイルは知っての通り「アーギュメンター」でした。彼は基本的にどんなオピシであろうと話し合わなければいけないポイントをいち早く見抜きそれをアーギュの形で提示し議論を「進めていました」つまり彼のアーギュは議論を深掘るだけでなく結論に導く「進める役割」も果たしていました。それはもちろん去年の 5th エキシビでもそうであり、僕はそのアーギュに手こずり結果負けました。ですが今年はどうでしょうか。僕が知っているアーギュは 5th エキシビでは見ることはできませんでした。

②感情論が多かったこと

これは今回のエキシビだけでなく試ジャッジなどでも思っていたことなのですが、自分の主張のリーズニングが論理的なものではなく主観的なものが多くみられましたね。今回のテーブルだととくに「結論をとることが大事だと思う」や

「それよりこっちのほうがいい」という主張を基にするサジェスションなども多く出ましたがそれがないがしろにされていた印象でした。まあそこに説得力がないのも当然かと。

③他人の話を全然取り入れてなかった

まあオピシの構造上みんなの意見を集めるという一見取り入れようとしていたが実際はそうでもなかったのかなと。色んな人の意見を集めてどれか一個にしようとする、ほかの人の意見はどうなってしまうのか、ないがしろにするのはもったいないじゃないですか。じゃあそういう時どうするかっていう事を考えることができるのもディスカッションの面白いところです。「A か B、どっちかに絞らなきゃいけない」って思っちゃうともしかしたら最善策になる C を思いつくことすらできなくなっちゃうし、それはディスカッションとしてもったいないんじゃないかなと思います。まあ言ってしまうと頑固な人達が 6 人集まったから自由度があんまなかったテーブルでした。

2. 春セミを通して思ったこと

①全体的なレベル

あくまで僕の主観なのですが全体的にみんな同じようなディスしかししないなあっていう印象を抱きました。まあ色がないってやつですかね。基本的にランクをとっている人たちは「サードまでは安定したパフォーマンスを出せる人たち」というイメージです。だから誰かが特別この分野で秀でているっていうのがあんましないから誰がうまいですかとか誰がエキシビいけそうですかとかよく聞かれてたけど、みんな同じぐらいに見えたし、誰でも行けるんじゃないかなって思っていたし、逆に言えばもしアッセンまでに何かのスペシャリストになれば全然リベンジできると思う。武器作りたくなったらいつでも声かけてください、その作りたい武器に合わせてその分野の専門の方を紹介します。

②ランクについて

毎年行われているのかな、ランカーを減らすかどうか論争。実際どっちが正しいかは僕にはわかりません。ただ僕は減らさない派でした。とてもすごい理由とかではないんですが、やっぱりどうしてもランカーであるかないかが多くの現役のこだわりになってしまうのかなと思うし、ランクが取れなかったらどうしてもディスと関わる機会が減っていくのかなと。となると、ディス界からそういう人たちは徐々に消えていってエジュケにも関わらなくなってきていくのかなと。またその一方でランクをとってもディス界からフェードアウトする人もいるか

らどんどんデイス界が衰退していくのかなとも思います。じゃあどうしてほしいか

ランクが取れなかった人へ：まずは自分がデイスが好きかどうかを見つめ直してください。これは競技面でのデイスもそうですし、議論という意味でのデイス、エジュケ、なんでもいいです。もしどれか自分が思うデイスカッションの面白いところ、魅力が1つでもあればそれを少しでも多くの人に教えてあげてください。オブリゲだとかいろいろあると思うけど、好きじゃないことに全力は注げないと思うし、むしろそういう人たちの背中を見ている後輩たちにもあんまりいい影響はないのかなと思うから、僕は全然でなくていいと思う。デイスを好きな人たち同士でデイスをするのが一番楽しいしそれがデイス界の発展につながるんじゃないかなと僕は思っています。あ、勘違いはしないでください。アッセン頑張るなって言ってるんじゃないです。もちろんつらい現実としてはランクが取れなかったら大会に呼ばれる機会はそんな多くはないしエジュケに関してもランカーに負い目を感じてしまうこともあると思う。そういうのが嫌だから頑張ってランクをとる、これも全然ありだと思う。

ランクが取れた人へ：ランクをとると大会にチェアパとして呼ばれることが多くなってくると思います。チェアパになると当然参加者のみんなにデイスを教える機会が増えてきます。その時にまずは自分らがその代のデイス界を代表していると自覚してください。自分のデイスだけでなくその代でどんなデイスがあったかを積極的に教えていってあげてください。また、常に向上心を持ってください。アッセンが終わったとしても自分の議論の能力に見限りをつけずどんどん成長してください。

最後に

春セミ期のデイスカッションは楽しかったですかね。僕は試ジャッジから春セミまでつまらないテーブルはなかったなって振り返って思いました。まあ理由は簡単で毎回何かしらの工夫をしていたからです。固定概念とか縛られるのがあんまり好きじゃなかったの。

まあそれが一番強いかはわからないけど「自由でいること」も一種の強さではあると思います。アッセンではもうちょっと自由なデイスを試ジャッジから見れることを期待しています。

P.S.あえて厳しめに書いたから偉そうだったりイラッと来たりしたらごめん。来年総評書くとき好きなだけ威張り散らかしていいから。じふぁんとかしゃちょーのがよっぽど偉そうだと思うけど笑
まあ仕返ししたくなったらいつでもデイスの挑戦は受け付けるので。